

巨大戦艦大和展

—新発見による艦橋復元—

7/1²⁰¹³月 ▶ 5/11²⁰¹⁴日

大好評! 開催延長

HISTORY 歴史から学ぶ

「第一号艦」を建造した呉海軍工廠造船渠の走行クレーン



TECHNOLOGY 科学技術を探る

1941年10月 宿毛沖全力公試中 機能の集中を図った戦艦「大和」の艦橋



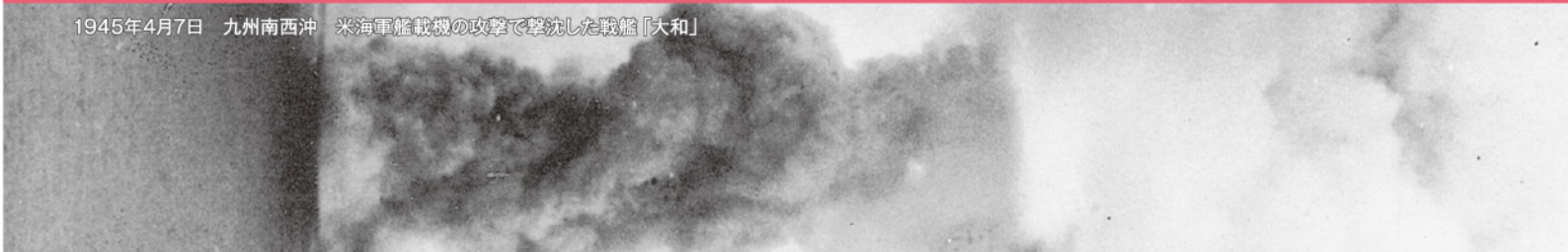
SHIP BUILDING ものづくりをたどる

1940年6月3日 呉海軍工廠 主砲塔旋回盤転倒作業



PEACE 平和を考える

1945年4月7日 九州南西沖 米海軍艦載機の攻撃で撃沈した戦艦「大和」



【会場】 大和ミュージアム1階 大和ホール

【料金】 一般(大学生以上)400円(800円) 高校生300円(500円) 小・中学生200円(300円) ※()内料金は常設展示とのセット料金

【開館時間】 午前9時～午後6時 【休館日】 毎週火曜日(祝日の場合は翌日)、2/17～2/21は臨時休館、2/11・4/29～5/6は開館

【協力】 株式会社IHI呉事業所 海上自衛隊呉地方総監部 海上自衛隊第1術科学校 海上保安大学校 株式会社唐津鐵工所 株式会社きしろ 小高正稔・寺西英之 ジャパンマリンユナイテッド株式会社呉事業所 株式会社ニコン 株式会社日本製鋼所室蘭製作所 パブコック日立株式会社

【お問合せ】 〒737-0029 広島県呉市宝町5番20号 TEL:0823-25-3017 FAX:0823-23-7400 <http://www.yamato-museum.com>

開催主旨

日露戦争後、欧米列強に日本が加わり、太平洋と東アジアの海軍力のバランスは大きく変化しました。このような中、大正2(1913)年、新鋭の巡洋戦艦「金剛」は、イギリスのヴィッカーズ社バロー造船所で竣工しました。日本が外国に主力艦として発注した最後の艦船です。

大正3(1914)年、第一次世界大戦が始まりましたが、この大戦では、のちの総力戦体制の出現と建艦競争が激化し、列強の軍備の拡張はますます進んでいきました。こうした状況のもと、大正11(1922)年に「軍縮会議」が、ワシントンD.C.で開催されました。日本もこの会議に参加し、「ワシントン海軍軍縮条約」を締結しました。軍縮期、条約による戦艦の保有量と建造制限が厳しい状況下、日本海軍は制限内の「条約型艦艇」の建造を行っていきました。

平成25(2013)年は、戦艦「金剛」の竣工から100年にあたります。ワシントン海軍軍縮条約で艦齢20年以上に達した戦艦は、代艦の建造が可能という規定から、まもなく艦齢20年をむかえようとする戦艦「金剛」は、それに該当するため代艦計画が行われました。ロンドン海軍軍縮条約の締結により、この計画は中止となりましたが、「金剛代艦」案は、後の大和型戦艦に影響を与えました。

昭和11(1936)年、第2次ロンドン海軍軍縮会議を脱退した日本は、軍縮時代に終わりを告げ、すでに検討中であった新型戦艦建造の計画に取りかかりました。

そして、昭和12(1937)年8月21日、日本海軍の象徴となるべき戦艦「大和」の建造命令は下されました。

本特別企画展は、「戦艦「大和」が何故計画されたのか?、建造にはどのような当時の科学技術が結集されたのか?、どのようにして造られたのか?、さらに現代の私たちへ残されたメッセージとは何か?」を、様々な視点で読み解くためのヒントとしてご提供いたします。

ご来館の皆さまの興味関心を触発する特別企画展であるものと関係者一同、こころよりご来場いただきますよう、ご案内いたします。

平成25(2013)年7月1日

たんけん!ミュージアムクイズ

館内各所で実施!! 無料 ※常設展観覧券が必要で
全問正解者に記念品贈呈!!

- こたえ
- Q1 きびしい訓練のひとつま?
(大和ひろば)
- Q2 世界一の技術の結晶?
(大和ひろば)
- Q3 これが本当の矛と盾?
(大和ひろば)
- Q4 はっきりと言葉を伝える?
(大型資料展示室)
- Q5 主食はやっぱりこれ?
(大型資料展示室)

※()内はクイズの場所

HISTORY 歴史から学ぶ

何故、戦艦「大和」が計画されたのでしょうか?

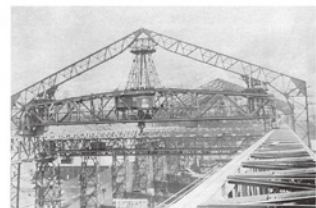
日露戦争後の東アジア、太平洋の海軍力のバランスは、均衡が保たれた状態とはいえませんでした。米西戦争を経て、ポーツマス条約締結を幹旋したアメリカは、明治40(1907)年、海軍力を誇示するために、大西洋艦隊の新造戦艦等を編成し世界一周をします。欧米列強に並んだ日本は、明治40年、国際安全保障体制の確立をめざし、帝国国防方針を策定します。

列強の建艦競争が続く中、大正9(1920)年、帝国国防方針と第一次世界大戦の戦争景気による経済成長を背景に、日本海軍は八八艦隊の整備計画を行いました。しかし、この計画は大正11(1922)年に締結されたワシントン海軍軍縮条約において中止となり、戦艦「長門」・「陸奥」と航空母艦に転換された「赤城」・「加賀」のみが建造されることになりました。

昭和3(1928)年、海軍はワシントン海軍軍縮条約にもつぎ、まもなく艦齢20年に達する戦艦「金剛」の代艦を計画中でしたが、ロンドン海軍軍縮条約の締結により、この計画は実現されませんでした。「金剛代艦」案は、のちに建造される戦艦「大和」に大きな影響を与えます。

昭和5(1930)年のロンドン海軍軍縮会議では、主力艦の建造停止を5年延長し、補助艦の保有率などについても制限しました。この条約締結後、満州事変、5・15事件、国際連盟脱退など軍事政権が日本の政戦略を主導するようになり、やがてロンドン海軍軍縮条約は破棄され、無条約時代へ自ら突入します。

このような背景のもと、国力的に劣勢であった日本が、圧倒的な戦艦の保有で国防を全うしようとしたため、戦艦「大和」の建造が行われました。



戦艦「大和」を建造した造船船渠の走行クレーン

TECHNOLOGY 科学技術を探る

戦艦「大和」にはどのような科学技術が集約されているのでしょうか?

日露戦争後の世界の海軍にとって、遠距離砲戦に勝つことが戦艦の主題となりました。第一号艦(のちの戦艦「大和」)に搭載される主砲は、計画段階から数年の間世界一の能力が必要でした。1930年代の列強の海軍には、直径46センチの主砲弾が発射可能な戦艦は存在していませんでした。戦艦「大和」は、日本海軍の持てる最高の科学技術を結集しなければ、建造できない艦艇として誕生しました。巨大な主砲を搭載し、その能力を維持するためには、常に安定した状態で正確な砲撃が可能なメカニズムが必要となります。

戦艦「大和」の艦橋は、砲撃継続のためのシステムの中核です。方位盤照準装置、射撃盤、測距儀、防空指揮所、昼戦・夜戦艦橋、司令塔からなる艦橋(前橋楼)は、戦艦の中央に配置され、射撃管制のための神経系統にあたる各種のケーブル、艦内各所との連絡用の伝声管、電話線などを保護するために二重構造となっています。また、主砲発射時の衝撃に耐え、敵艦からの砲撃を避けるため、必要最小限のサイズと形状になっています。さらに、約50km先の目標を捉え、方位、距離、速力、風速、温度、地球の自転速度など複数の変数を解析し、主砲弾の着弾位置と目標到達位置を予測し、最適なタイミングで射撃可能にする、複雑で確実なくみを統括する場所が艦橋そのものといえるのです。



戦艦「大和」の艦橋
機能の集中を図った艦橋(中央拡大)

SHIP BUILDING ものづくりをたどる

戦艦「大和」はどのようにしてつくられたのでしょうか?

明治36(1903)年に設立された呉海軍工廠は、東洋といわれる規模の造船ドック、製鋼施設、砲煩(ほうこう)製造設備などを備えていました。戦艦「大和」の建造ドックは既にあった造船ドックを、わずかに1m掘下げ、側壁を1m削るだけのものでした。国民から募金が集められるなど注目のなか建造され、大規模な進水式を行った戦艦「長門」と異なり、「大和」は最高機密の軍機扱いの戦艦として、昭和12(1937)年、防諜体制、各種の秘匿措置のもとで起工されました。工廠内では設計部の図面閲覧から工員の勤務中や、建造時においても厳しい管理下に置かれました。造船ドックには、大屋根が設置され、宮原地区の家屋や学校の窓には目隠しがされ、呉湾においては、船舶の航行規制など巨大な艦容がさとられない工夫が広範囲に行われました。

亀ヶ首試射場では、46センチ砲弾を越える規模の射撃実験が既に行われていました。また、一号艦から三号艦までの主砲身、主砲塔とともに、耐弾性能に優れ、合理的な製法で開発された各種の装甲板などは、呉海軍工廠と日本製鋼所室蘭工業所から供給されました。開設以来、技術と人材が集積された呉海軍工廠は、一番艦建造にふさわしい実績と誇りに満ちあふれていました。また、科学的管理法、生産の合理化の普及の中心地として呉海軍工廠の持てる能力は、当時、最大限に生かされたといえます。



戦艦「大和」主砲塔旋回装置の解体作業終了

PEACE 平和を考える

戦艦「大和」が現代の私たちに残したメッセージとは何でしょうか?

戦争終結の目算も立たないままに始められた太平洋戦争は、戦局の悪化とともに総力戦、消耗戦の影響が直接国民に及ぶ結果を招きます。戦艦「大和」が起工される昭和12(1937)年には、支那事変に伴い、日本海軍初の航空機による渡洋爆撃が行われました。また、前日から行っていた公試中の主砲射撃テストを終えた昭和16(1941)年12月8日、真珠湾攻撃が開始されました。昭和17(1942)年6月5日のミッドウェー海戦の敗北から、日本海軍は次第に守勢に回らざるを得なくなります。同年12月に大本営は、ガダルカナル島の撤退を決定します。昭和19(1944)年に入ると、戦況はますます悪化し、6月には、アメリカ軍による本土空襲がはじまります。11月には、B29による東京大空襲があり、以降東京では106回の空襲がくり返されます。

昭和20(1945)年3月19日には呉空襲がはじまります。このようななか、戦艦「大和」はわずかな直掩機とともに、沖縄諸島への連合国軍の進攻阻止のため、天一号作戦の一環として第一遊撃部隊を編成し出撃します。同年4月7日、第二艦隊とともに沖縄へ向かった戦艦「大和」は作戦途中で、アメリカ空母艦載機の波状攻撃にさらされ、多くの生命とともに海底深く沈むことになります。



戦艦「大和」の沈没
昭和20(1945)年4月7日